



日本足の外科学会

50周年

記念誌



日本足の外科学会50周年記念

日本足の外科学会 50周年記念誌出版にあたって



日本足の外科学会は1976年に「足の外科研究会」として発足し、1987年に「日本足の外科研究会」、1991年に「日本足の外科学会」、2017年に「一般社団法人日本足の外科学会」へ移行し、現在は会員数1800名を超える学会にまで発展してきました。足部・足関節の疾患や外傷を中心に研究を行い、「足の病気の専門家」集団として、学術集会の開催、学会誌の刊行、認定医制度をはじめ様々な事業を展開しています。

節目の50周年に向けてヒストリアン委員会を中心に2022年から様々な記念事業を企画してきました。記念サイトの開設（2024年6月）、記念式典（2025年11月）、50周年記念賞（2025年11月）、そして締めくくりとして記念誌の発行（2026年2月）です。記念誌には、学術集会をはじめとした学会活動の記録、地方会や委員会での活動など、本学会のこれまでの歴史を写真とともに掲載しました。

記念誌を含む本事業が、本学会のこれまでの軌跡を記録として未来に残し、かつ将来に向けてのあらたな出発点となることを祈念しております。ご執筆いただいた先生方におかれましてはその意義をご理解いただき、ご協力いただきました。この場を借りまして、心より感謝申し上げます。また、記念誌をはじめ50周年記念事業の数々の企画、運営に多大なご尽力を賜りましたヒストリアン委員会担当理事の嶋先生、委員長の磯本先生をはじめ委員の先生方に深く御礼申し上げます。

今後は100周年に向けて、皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

理事長 **仁本 久照**

聖マリアンナ医科大学 名誉教授／府中恵仁会病院 病院長・足の外科センター長

目次

記念誌出版にあたって	3
祝 辞	7
日本足の外科学会50年のあゆみ	12
フォトアルバム	14

第1章 日本足の外科学会のあゆみ 57

足の外科の発展を求めて — 研究会発足から学会への軌跡 —	58
理事・評議員制導入に関して	59
日本足の外科学会の一般社団法人化について	60
日本足の外科学会のホームページ	61
日本足の外科学会ロゴマーク	65

第2章 学会活動の記録 67

JSSFスケール（日本足の外科学会 足部・足関節治療成績判定基準）	68
SAFE-Qの開発	70
用語委員会と私	74
外反母趾診療ガイドライン作成について	78
日本足の外科学会教育研修会 開催について	82
日本足の外科学会機能解剖セミナー 開催について	86
足の外科普及プロジェクト	89
日本足の外科学会認定医制度について	93
日韓トラベリングフェロー	95
スポーツ医学における足の外科の普及活動 （旧スポーツ委員会について）	98

第3章 国際学会とのあゆみ 101

国際足の外科学会（CIP）の歴史	102
国際足の外科学会（IFFAS）の創設と その後の経過	104
アジア足の外科学会（AFFAS）の発足と その後の経緯	107
Asian Federation of Foot and Ankle Surgeons（AFFAS）の活動	109
日英合同足の外科学会の発足と その後の経過	111
日米足の外科学会	113
第1回日西（スペイン）足の外科学会	116

第4章 学術集会の記録 119

日本足の外科学会歴代会長	120
第1期 草創期（研究会期） 第1回～第15回（1976年～1990年）	123
第2期 成長期（学会初期） 第16回～第33回（1991年～2008年）	147
第3期 発展期（理事・評議員制導入後） 第34回～第50回（2009年～2025年）	185

第5章 50周年記念式典の記録 245

式典報告	246
50周年記念賞受賞者	250

第6章 地方会のあゆみ 251

北海道下肢と足部疾患研究会	252
青森足の外科研究会	253
秋田県足の外科・創外固定研究会	254
山形足の外科セミナー	255
宮城足部疾患検討会	256
新潟足を語る会	257
関東足の外科研究会	258
茨城足の外科研究会	259
千葉県足関節足部疾患研究会	260
信州足の外科研究会	261
東海足と靴の研究会	262
静岡足の外科フォーラム	263
北陸足の外科セミナー	264
近畿足の外科研究会	265
中国・四国足の外科研究会	266
広島足の外科研究会	267
山口足の外科研究会	268
四国足の外科研究会	269
九州足の外科研究会	270
福岡足の外科・骨疾患カンファレンス	271
足の疾患を考える会	272

第7章 委員会活動報告 273

医療安全管理委員会	274
英文ジャーナル委員会	275
学術委員会	276

教育研修委員会	277
広報委員会	278
国際委員会	279
財務委員会	280
社会保険委員会	281
出版企画委員会	282
将来計画委員会	283
診療ガイドライン委員会	284
組織基盤委員会	285
認定医委員会	286
ヒストリアン委員会	287
用語委員会	288
歴代各種委員会担当理事、委員長一覧	289

第8章 資料 291

年表	292
会員数の推移／学術集会演題数の推移	294
学術集会における主要演題テーマの変遷	295
学術集会主要プログラム	296
アワード／ 海外留学助成リサーチフェローシップ／ 多施設共同研究	321
教育研修会プログラム	323
編集後記	328

日本足の外科学会 50年のあゆみ

1976年に『足の外科研究会』として発足して以来、
日本における足の外科の発展と普及をめざし活動を続けてまいりました。

歴代代表・理事長



初代代表
三好 邦達
1976～1994年



第2代代表
青木 治人
1994～2005年



第3代代表・初代理事長
高倉 義典
2005～2012年



第2代理事長
木下 光雄
2012～2015年



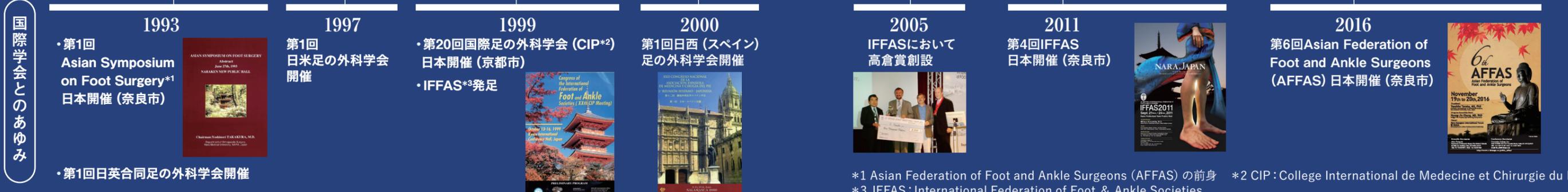
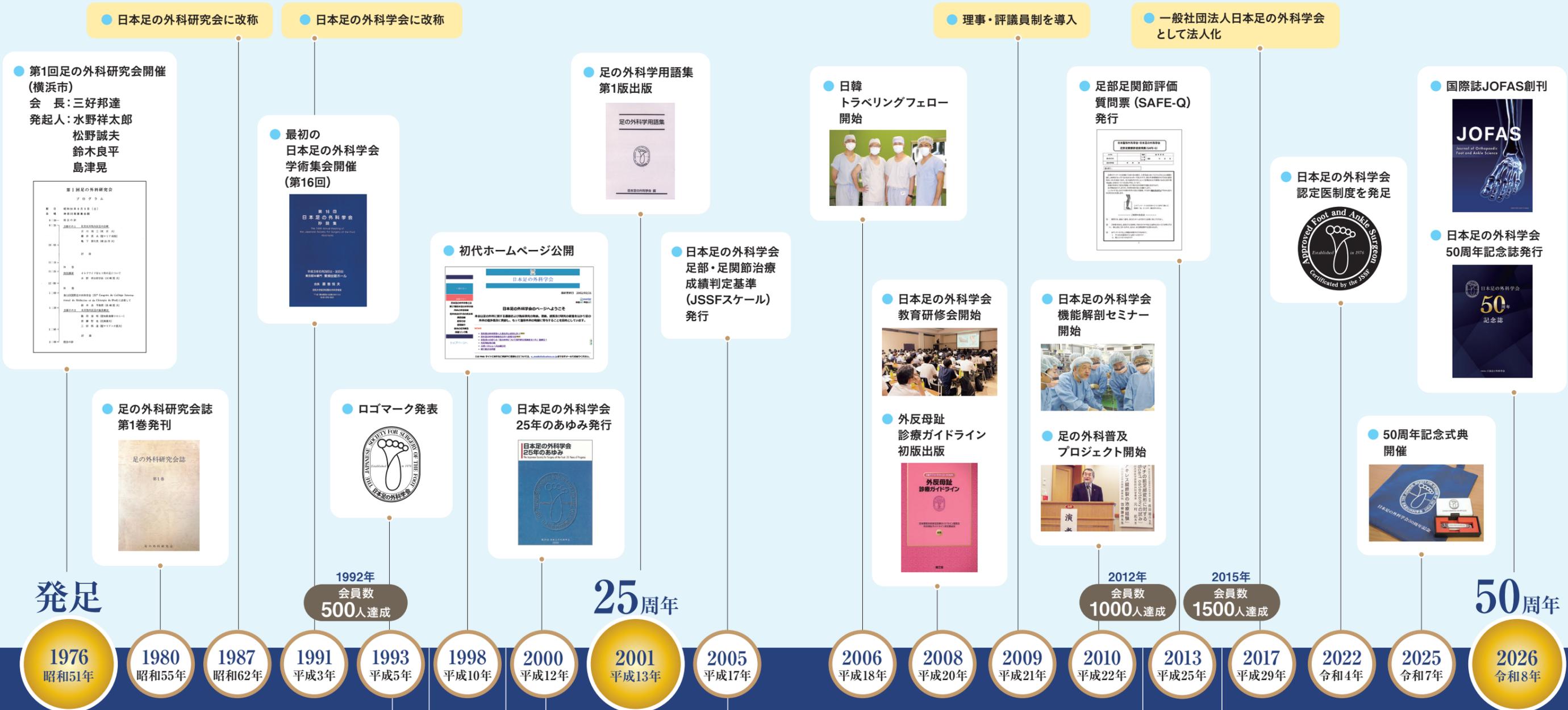
第3代理事長
大関 覚
2015～2020年



第4代理事長
田中 康仁
2020～2022年



第5代理事長
仁木 久照
2022年～



国際学会とのあゆみ

*1 Asian Federation of Foot and Ankle Surgeons (AFFAS) の前身
*2 CIP: College International de Medecine et Chirurgie du Pied
*3 IFFAS: International Federation of Foot & Ankle Societies

学術集会

成長期 (学会初期) 1991-2008



第18回
高倉会長 開会挨拶



第18回
Viladot先生と鈴木良平先生



第19回
茂手木会長



第20回
Anderson先生



第20回
亀下先生



第20回
佐野先生



第20回
亀下先生と藤井先生



第22回
Sangeorzan先生

用語委員会と私

千葉・柏リハビリテーション病院 病院長 山本 晴康



私と用語委員会とのかかわり

日本足の外科学会（JSSF）は50年を迎えた。私は学会発足の当初よりこの学会に属し臨床、基礎の研究活動を行ってきた。この50年を振り返ると、最も心に残る印象は用語委員会とのかかわりである。研究活動を行う中で適切な評価法と適切な用語を使用することが口演、論文発表に際して極めて重要であり、それらが不適切であると、いくら研究が独創的でも、研究対象が稀少でも数が多くても、論文としては今一つである。私がこれまでJSSF用語委員会委員長や日本整形外科学会（日整会）の診断・評価等基準委員会担当理事を務めてきたが、これらは評価法と用語の大切さが骨の髄までしみ込んでいることを反映しているのではないかと推察している。

用語委員会とのかかわりは、1995年に出来た第1次用語委員会を引き継いだことに始まる。第1次用語委員会は委員長の廣島和夫先生、顧問の島津晃先生、委員の北田力先生、木下光雄先生、藤井英夫先生の関西の先生方が、7～8割がた仕事をされた後、次は関東でして欲しいということで私が第2次用語委員会の委員長を引き継いだ。

1. 第2次用語委員会

委員長が私で、委員を宇佐見則夫先生、大関覚先生、仁木久照先生、長谷川惇先生

にお願いし、第1次用語委員会の作業行程を踏襲し、会合、メールで意見を交換して用語の選定、日本語と英語との適切な対応などを行い、用語については幹事の先生方にも検討して頂き、足部・足関節の解剖、JSSFとAmerican Orthopaedic Foot & Ankle Society(AOFAS)の成績判定基準も併せて掲載し、用語集としての体裁を整え、適切な印刷費の検討、出版社の選定を行い、2001年に用語集の発刊にこぎつけた(図1)。これで一安心して第2次用語委員会は休会状態であった。

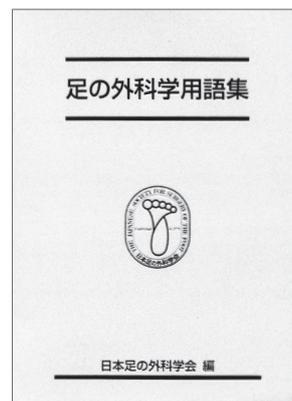


図1 用語集第1版

私が日整会理事を拝命していた2005年の日整会理事会に、1995年に日整会と日本リハビリテーション医学会（日本リハ医学会）で使用されている足部・足関節の「関節可動域表示および測定方法」に翻訳時の混乱から

国際足の外科学会 (IFFAS) の 創設とその後の経過



西奈良中央病院 顧問
奈良県立医科大学 名誉教授
高倉 義典

欧州と南北アメリカに加えて、アジアおよびオセアニアを含めて、統一された国際足の外科学会は正式名称がInternational Federation of Foot & Ankle Societies,略してIFFASと呼称された。本会は1999年に第19回のCollege International de Medecine et Chirurgie du Pied (CIP) 学会開催時に、当時のBasil Helal CIP理事長、Eric Anderson CIP事務局長およびアメリカ足の外科学会 (AOFAS) のG. James Sammarco 会長らが中心となって、設立の話し合いが持たれた。その際に第20回CIP学会が、日本の京都で故鈴木良平長崎大学名誉教授の会長のもとで開催されることが決定され、それがそのまま第1回IFFAS学会になるものと、日本会員は信じていた。しかし、第1回理事会 (図1) が学会終了後に開催されたために、

異議申し立てが理事会に提出されて、投票の結果、京都学会は創設学会となり、大変残念な思いをした。

第1回IFFAS学会はアメリカのサンフランシスコで、2002年9月12~14日の3日間、Michael J. Coughlin先生およびRonald Smith先生の2名の会長のもとで盛大に開催された (図2)。理事長メダルも初代の高倉義典から第2代理事長の米国のCoughlin先生に譲渡された (図3)。



図1 第1回IFFAS理事会 (1999年京都国際会議場にて)
前列左からAnderson欧州代表理事、Pandeyアジア代表理事、Coughlin次期理事長 (USA)、高倉理事長、Greta Dereymaeker財務理事 (欧州代表)、Simonovich事務局長 (南米代表理事)、後列左から事務長、井口傑アジア代表理事、Smith北米代表理事、Malerbra欧州代表理事、Carvalho南米代表理事、Oliveira南米代表理事

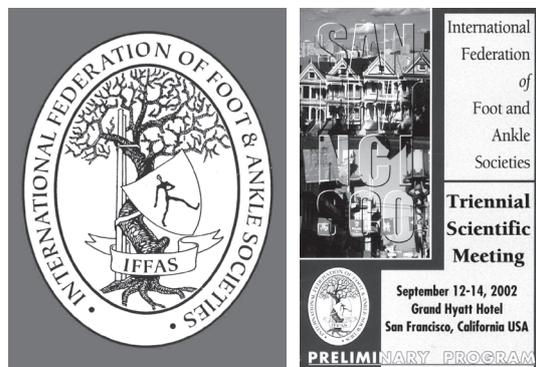


図2 IFFAS学会のシンボルマークと第1回学会抄録集

図3 理事長メダルと譲渡



日本足の外科学会歴代会長

第1期 草創期(研究会期)



第1回 1976年(昭和51年)
聖マリアンナ医科大学 整形外科 教授
三好 邦達



第2回 1977年(昭和52年)
北海道大学 医学部 整形外科 教授
松野 誠夫



第3回 1978年(昭和53年)
長崎大学 医学部 整形外科 教授
鈴木 良平



第4回 1979年(昭和54年)
大阪市立大学 医学部 整形外科 教授
島津 晃



第5回 1980年(昭和55年)
筑波大学 臨床医学系 整形外科 教授
吉川 靖三



第6回 1981年(昭和56年)
大阪大学 医学部 整形外科 教授
小野 啓郎



第7回 1982年(昭和57年)
山形大学 医学部 整形外科 教授
渡邊 好博



第8回 1983年(昭和58年)
東京大学 医学部 整形外科 教授
津山 直一



第9回 1984年(昭和59年)
奈良県立医科大学 整形外科 教授
増原 建二



第10回 1985年(昭和60年)
神奈川県立こども医療センター
整形外科 部長
亀下 喜久男



第11回 1986年(昭和61年)
京都府立医科大学 整形外科 教授
榎田 喜三郎



第12回 1987年(昭和62年)
福岡県立粕屋新光園 園長
松尾 隆



第13回 1988年(昭和63年)
国立東京第二病院 整形外科 部長
加藤 哲也



第14回 1989年(平成元年)
日本大学 医学部 整形外科 教授
佐野 精司



第15回 1990年(平成2年)
姫路聖マリア病院 整形外科 部長
藤井 英夫

第2期 成長期(学会初期)



第16回 1991年(平成3年)
昭和大学 医学部 整形外科 教授
藤巻 悦夫



第17回 1992年(平成4年)
北海道大学 医学部 整形外科 教授
金田 清志



第18回 1993年(平成5年)
奈良県立医科大学 整形外科 助教授
高倉 義典



第19回 1994年(平成6年)
東邦大学 医学部 整形外科 教授
茂手木 三男



第20回 1995年(平成7年)
九州労災病院 整形外科 部長
野村 茂治



第21回 1996年(平成8年)
東京医科歯科大学 整形外科 助教授
山本 晴康



第22回 1997年(平成9年)
聖マリアンナ医科大学 整形外科 教授
青木 治人



第23回 1998年(平成10年)
大阪医科大学 整形外科 助教授
木下 光雄



第24回 1999年(平成11年)
慶應義塾大学 医学部 整形外科 講師
井口 傑

第1回

第1期

草創期
(研究会期)

1976～1990年

学術集会の記録

- 会期
1976年(昭和51年)6月5日(土)
- 会場
神奈川県薬業会館(神奈川県横浜市)

会長
聖マリアンナ医科大学
整形外科学講座
主任教授
三好 邦達



聖マリアンナ医科大学
名誉教授/
府中恵仁会病院
病院長・足の外科センター長
仁木 久照



聖マリアンナ医科大学
整形外科学講座 講師
三井 寛之

1975年(昭和50年)4月、第48回日本整形外科学会の先天性内反足のセッションにおいて、内反足をもっと時間をかけて討論できる場を研究会として作るべきであるという声が集まり、同年、水野祥太郎先生、松野誠夫先生、鈴木良平先生、島津晃先生、そして第1回足の外科学研究会会長となる聖マリアンナ医科大学初代主任教授の三好邦達先生らが発起人となり本研究会の準備が始まった。

1976年(昭和51年)6月5日に「第1回足の外科学研究会」が神奈川県薬業会館(現・神奈川県総合薬事保健センター)で開催され、これがのちの日本足の外科学会の前身となる。当時の研究会は朝9時から始まり15時までの1日間の日程で、参加者も50人程度の小規模な会であった。発起人の三好先生は先

天性内反足の装具治療の講演をされたとの記録が残っている。

その後、本会は先天性内反足以外のテーマも扱うようになり、1987年(昭和62年)に「日本足の外科学研究会」、そして1991年(平成3年)に現在の「日本足の外科学会」に名前を変え、令和を迎えた2020年代には1600名規模の学会にまで成長し目覚ましい発展を遂げた。

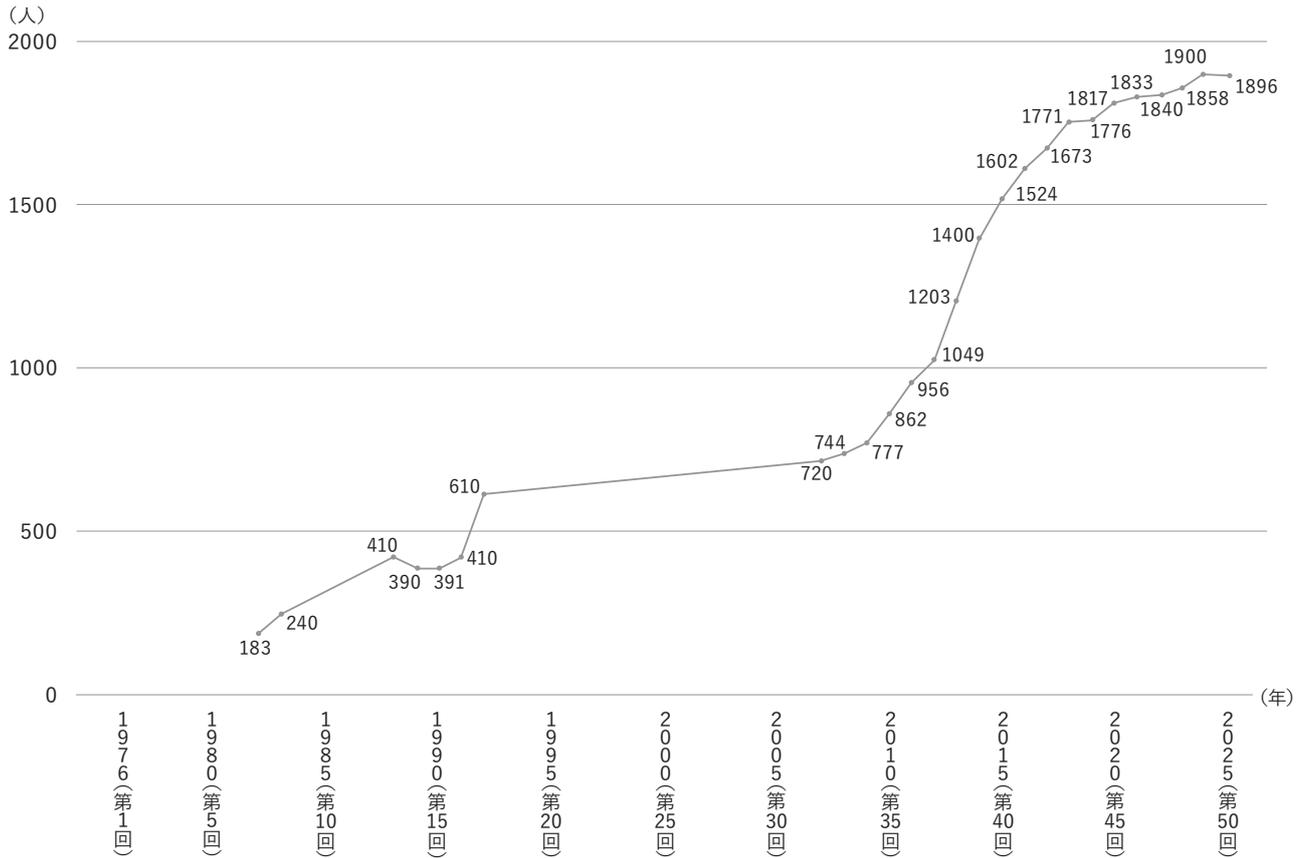
先天性内反足を討論する事、ひいては足の外科の技術向上を目指して先人達が集った第1回研究会から約半世紀を経た2024年(令和6年)8月3日、同センターにて第16回日本足の外科学会教育研修会が開催された。本学が主幹校を務め、第4代主任教授仁木久照先生による扁平足診療の基礎をテーマとした講演、また教育研修委員会の先生方による足の外科診療における基礎から臨床応用まで幅広いテーマの講演が行われ、全国から100名以上の参加者があり大盛況のうちに閉会を迎えた。第1回研究会で同センターに集った先人達の精神と情熱は脈々と現代に受け継がれ、教育研修会として再び同センターで花開いたと感ぜられる1日となった。

式典報告

式次第

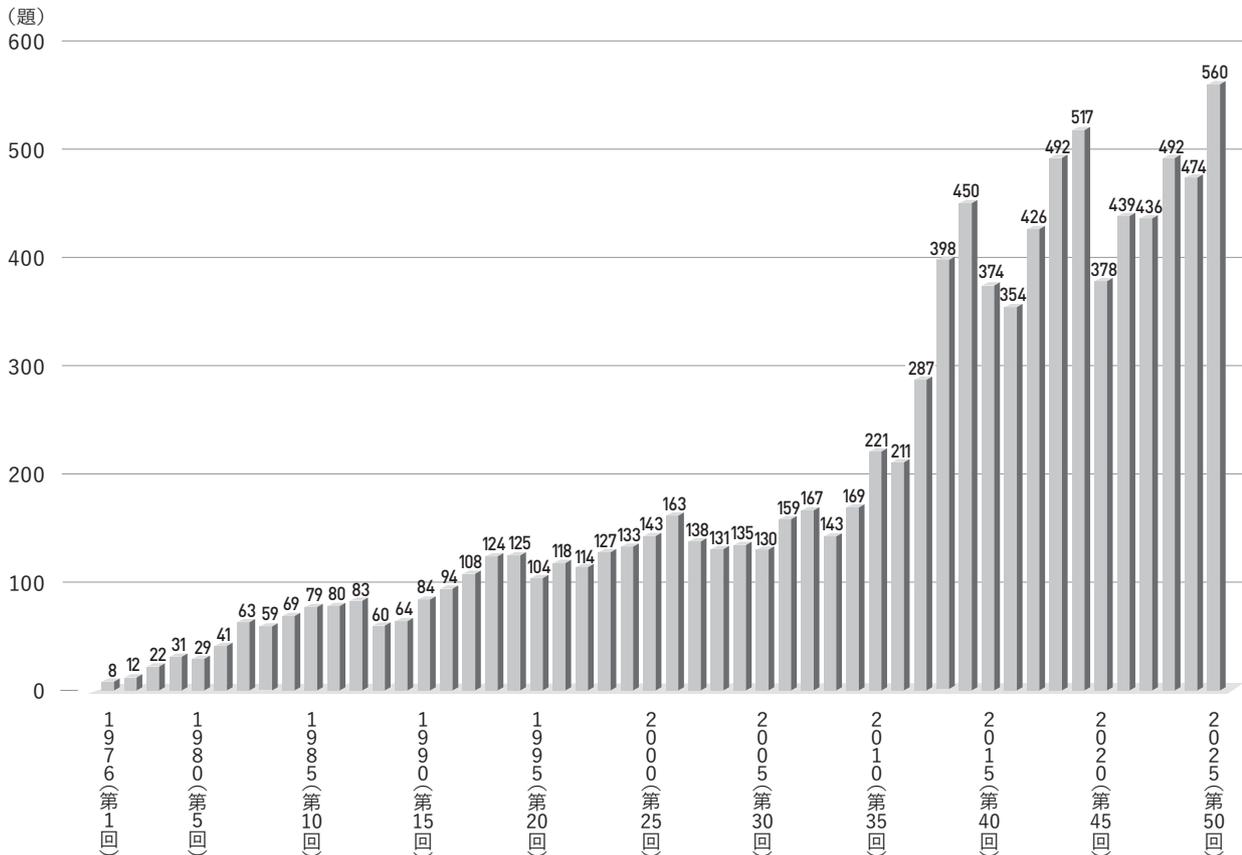
1. 開会の辞 日本足の外科学会 理事長 仁木 久照 (府中恵仁会病院)
2. 祝辞 日本整形外科学会 理事長 河野 博隆 (帝京大学医学部整形外科)
3. 記念講演 座長:青木 治人 (横浜市スポーツ医科学センター)
 「私と足の外科」 演者:木下 光雄 (西宮協立脳神経外科病院)
 「足の外科との52年間の格闘」 演者:高倉 義典 (西奈良中央病院)
4. シンポジウム:足の外科革新への道 ~発想と着眼点が生んだ日本発の進化~
 座長:山本 晴康 (千葉・柏リハビリテーション病院)
 「荷重時足正面X線像に対するMapping法の着想から応用まで」
 演者:田中 康仁 (医真会八尾総合病院足の疾患センター)
 「踵骨を含む下肢全長撮影」
 演者:原口 直樹 (聖マリアンナ医科大学整形外科)
 「日本における足部疾患治療成績評価の変遷
 SAFE-QはJSSFの歴史に名を刻むか」
 演者:仁木 久照 (府中恵仁会病院)
 「遠位脛骨斜め骨切り術
 Distal Tibial Oblique Osteotomy (DToo) の発想と着眼点」
 演者:寺本 司 (長崎百合野病院足の外科センター)
 「外反母趾における第1中足骨頭外側縁のround徴候—その発見とインパクト—」
 演者:奥田 龍三 (洛西シミズ病院整形外科)
 「鏡視下外側靭帯修復術」
 演者:高尾 昌人 (重城病院CARIFAS足の外科センター)
5. 足の外科医座談会:足の外科の未来へつなぐ視点—50周年を機に語り合う
 座長:橋本 健史 (慶應義塾大学スポーツ医学研究センター)
 寺本 篤史 (札幌医科大学整形外科)
 演者:生田 祥也 (広島大学病院整形外科)
 池澤 裕子 (ライフ・エクステンション研究所附属永寿総合病院)
 鈴木 朱美 (山形大学整形外科)
 谷口 晃 (奈良県立医科大学整形外科)
 平尾 眞 (日本医科大学整形外科)
 山口 智志 (千葉大学大学院国際学術研究院)
6. 50周年記念優秀論文賞、最多論文賞 表彰
7. 閉会の辞 日本足の外科学会 理事長 仁木 久照 (府中恵仁会病院)

会員数の推移



※1976～1981年（第1回～第6回）は会員制以前のため、1984～1987年（第9回～第12回）、1993～2006年（第18回～第31回）は会員数の記録がないため掲載しておりません

学術集会演題数の推移



※抄録集による集計